2013 年度

関西大学ＴＡＦＳ佐治スタジオ

「関わり続けるという定住のカタチ」と
「21世紀の故郷作り」による地域再生

滞在型講座

「丹波で暮らす」ワークキャンプ

現地にじっくりと滞在し、身体で感じることの中から地域再生への糸口が見えてくる･･･。

滞在型交流ワークキャンプ

１週間滞在し、農業や林業など地域の生業体験と暮らし体験。

「地域再生」滞在型講座

地域再生に関わる教員による２泊３日の滞在型ゼミ。

地域交流ワークショップ

毎月１回、現地に学生が訪れ、地域と交流する中から感じる「丹波の魅力」を学生目線で発信する。
今年のテーマは、大学生のような若い世代が丹波を楽しむためのガイドブック「丹波の遊び方」作り。

ＡＴＡＣＯＭ -アタコム-

氷上町中央地区の伝統的祭り「愛宕祭り」への参加を通じて、地域と協働しながら継続的にまちづくりに関わっています。
愛宕祭りの「造り物」の製作を中心に、祭りの事業企画・提案など学生が主体的に活動するグループ「ＡＴＡＣＯＭ」を立ち上げ活動を展開しています。

「公園を作る」から「作り続ける公園＝運動体としての公園」へ

「公園を作り続けているというプロセス」が、交流型定住人口の増加や空き家、空き地の活用といった地域の抱える課題の解決や地域独自のまちづくりへと繋がっていく。

沢野遊園地改修計画

佐治倶楽部

佐治らしい景観、佐治らしい暮らし
空き家活用サークル

「空き家は地域の資源」
地域が主体となって、空き家の活用やリノベーションを仕掛けていく仕組みが必要だ！ということで2011年1月、佐治倶楽部設立。
会員制で、佐治スタジオなど３軒の空き家をシェアし、様々な活動の生まれる場所として活用中！

青垣町の魅力発信！広報誌「サジサジ」月1回発行。

×大路こどもの森 ツリーハウス

「森と関わる」居場所を作ろう！
春日町大路地区の大路こどもの森にて大学生と地元が協同し、ツリーハウス作りに挑戦した！ここを拠点に新しい森の魅力を発信できればいいな。

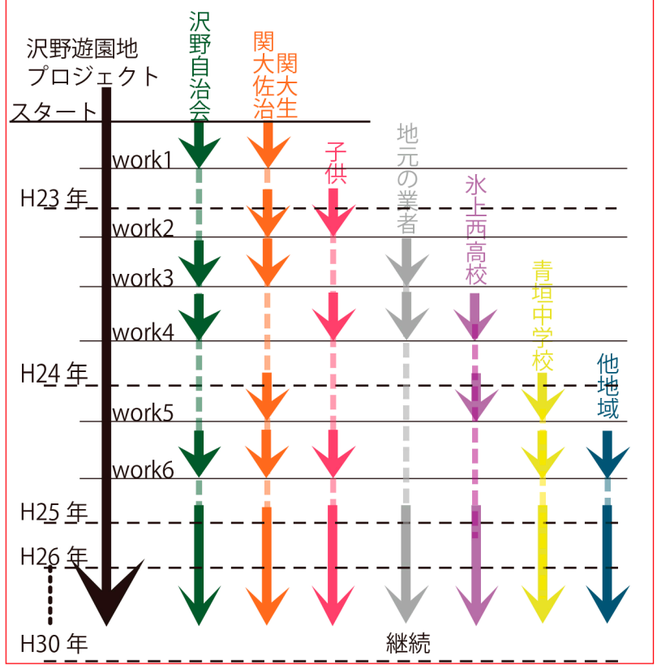
問合せ　関西大学ＴＡＦＳ佐治スタジオ　兵庫県丹波市青垣町佐治683 tel/fax0795-86-7078

沢野遊園地改修プロジェクト

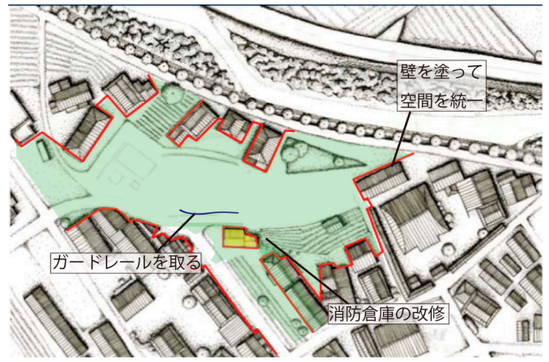
このプロジェクトは丹波の沢野集落の方から依頼を受けたもので、新しい公園を計画して欲しい言われました。
しかし、単純に新しい公園を作ることでは「公園が使われていない」という現状の根本的な問題は解決できていないと考え、時間を分けて、沢野の人と協働して改修し続ける仕組みを考え三つの提案をしています。

提案１　運動体の公園作り

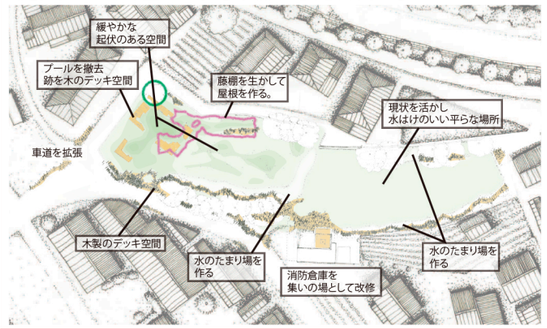
運動体とは、常に公園で誰かが、何かが、動き続けていることで誰もが自由に公園の改修をできる状況のことです。



提案２　建物に囲まれ、落ち着いた空間をつくる



提案３　公園にある資源を活用する



現在の活動

沢野レシピ「初級編」（仮）作成

三つの提案を軸に沢野をどのように改修していくかを住民の方と考えるための提案書を作っていきます。

沢野 WS　沢野収穫祭！！

レシピにのっている提案を WS で実際に行いました。このように私たちが率先して活動をしていきながら沢野の人を巻き込み、最終的には地域の人が率先して活動していって欲しいと考えています。
今後も様々な WS をしていき、沢野集落の方と協働して沢野遊園地を改修していきたいと思います。

ツリーハウスプロジェクト

協働団体　「ツリーハウスプロジェクト樹庵」

大路こどもの森で切り開いた木材をツリーハウスにすることで、里山を作りながら、コミュニティの場を作り、さらにツリーハウスが壊れるとその木材は森に還ることで、一つの森で小さな循環が生んでいる。
またツリーハウスづくりを WS にして、森と関わる人や機会を増やして、森への関心深めています。

0 学生が協働する力

20 人以上で提案を考え、ツリーハウスを一週間で作成していきました。ツリーハウス作成は 15 人で行い、一週間という短期間で作り上げれたことはたくさんの人の協力と学生の熱意や意欲がなせるわざだと感じました。

1 地元の人と協働して作る

今回のワークキャンプは学生だけで制作するのではなく地元の大工さんなどに力を借りて一緒に制作していきました。
学生だけでつくるのではなく、デザインを共有して地元の人の意見を取り込みながら作成していきました。

2 地元の人と交流する

作成中に、私たちのために宴会を開いてくれました。地元の人が積極的に関わりを作ってくれ、関わるきっかけを与えてくれました。

3 コミュニティの場となる

作業中に子ども達が遊びに来てくれました。作り終わった後も地域の方々が使ってくれています。大路の方のためになるように作りましたが私たちもどんどん活用したいと考えます。これがあることで私たちの活動が大路へと展開していきやすくなります。

4 関わり協働し続ける

写真はツリーハウスを手伝ってくれた大路の方がしている活動です。ツリーハウスをきっかけに彼らの活動に参加しました。また私たちから企画を発信していて、今後もツリーハウスが軸となり彼らと関わり続けていきます。

ATACOM アタコム

■ 愛宕祭 あたごまつり

江戸中期、兵庫県丹波市氷上町成松周辺では飢饉や大火が続き、これを憂えた有志が火難除けの神として名高い京都の愛宕神社年に参拝し、鎮火と五穀豊穣を祈願して成松の分社を設け、毎年24日を大祭日と定め、まちをあげての祭りとなりました。現在は毎年8月23日・24日は成松一帯を舞台に催される愛宕祭が開かれ、23日午後に行われる護摩供養で幕を開けます。夜になると地元企業や名団体による氷上町音頭鵜の練り込みがあり、たくさんの露店が並ぶ中、商店街を抜け中央小学校に集まり、盆踊りを披露します。

練り込み

納涼大花火大会

宮司巡拝

護摩供養

■ 造り物 つくりもの

氷上町中央地区の愛宕祭の特徴はなんと言っても300年の伝統を持つ「造り物」です。造り物とは、家の土間やガレージを使って展示する飾り物（奉納物）のことで、「一式作り（同一種類の材料のみで作る）」「使用する材料を加工してはならない」という伝統的なルールに沿って製作されます。造り物は、町内ごとに製作し、祭の当日一斉に公開され、多くの方が造り物を見て楽しみ、まちを巡ります。その姿は個性溢れるものばかりで、世代や製作した隣保によって多種多様です。それらは全て300年の伝統を受け継ぎ、まちの人たちが大切にしてきた「造り物」の姿です。

しかし最近になって、造り物に対する人々の興味が薄れています。また、人々が小学校にのみ集まるようになり、まちを回遊することが減ることで、本来のまち全体を使った愛宕祭の魅力が失われつつあります。

祝儀物一式

家の土間に飾られる

■ ATACOM あたこむ

ATACOMとは愛宕祭に学生が参加することで、新しい風を送り込み、祭りをそして地域を盛り上げていこうというプロジェクトです。2010年から始まったこのプロジェクトは今年で4年目を迎えました。プロジェクト名のATACOMは「ATAGO COMPETITION」の略語です。もともとは学生提案の造り物の実施コンペとして始まったのですが、現在ではその枠を超え、「愛宕祭実行委員会事業部」にも参加させていただき、まちの皆さんと共に愛宕祭を盛り上げています。

■ 始まりの年　2010

「造り物審査会」「一週間の泊まり込み制作合宿」など現在も続く、ATACOMの活動の原点となる年でした。造り物は「ガレージにいる、山のこども」。端材を使い、成松の甲賀山を作りました。自然素材を使ったことで木の匂いや音、そして山の中に入れる空間的な提案の造り物は地域の方々にも新鮮に映っていたようです。また活動を地域の方々に知ってもらうために、消防倉庫を借りて活動の記録の写真、学生が考えた造り物の提案を展示しました。

■ 挑戦の年　2011 “まきこむ ATACOM”

この年から活動のテーマを決めることになりました。「まきこむATACOM」にはいろんなコト、モノ、ヒトを巻き込みながら活動を進めるという意味があります。造り物は「YAMA CHILDREN TANBA DRAGON」。山に落ちている枝を皆で拾いにいき、その落ち枝で丹波竜をつくりました。この年から正式に造り物の審査に混ぜてもらうことになり、一般審査員が選ぶ造り物の特別賞を頂きました。また、ワークショップやライブペインティング、ATACOMMOVIE、サイン計画（ゲリラ的に行った。）を行い、造り物以外の催し物を企画、運営を始めたものこの年からです。たくさんの挑戦をした年でもあり、ATACOMにとって大きな変化の年であったと言えます。

■ 再認識の年　2012　“Re:ATACOM”

この年のテーマは「RE:ATACOM」3年目を迎えたATACOMの活動、もう一度愛宕祭、造り物、ATACOMを見直す活動としようというものでした。この年は地域の伝統に大きな変化がありました。学生と地域の方が一緒に作った造り物ができたのです。チームの垣根を越えてひとつの造り物を作るのは300年の歴史上初の出来事です。また「関西デザイン学生シンポジウム」で活動の発表をさせていただき、多くの人に愛宕祭の魅力を伝えることができました。造り物は「ヒノカメ」。丹波にある荒れた茅場を学生が刈りにいき、刈った茅を使って、亀を作りました。

■ 習熟の年　2013 “つながるATACOM つなげるATACOM”

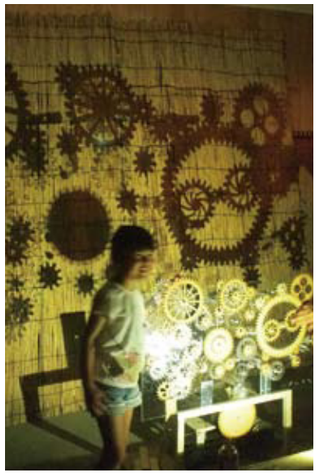
「つながるATACOM つなげるATACOM」には愛宕祭といろんな人をつなげ、魅力を知ってもらおうという意味が込められています。造り物は「風立ちぬ」。手持ちかざぐるま一式で作りました。この年の造り物審査会では議論が白熱し、会場で最優秀作品が決まりませんでした。しかし議論の中で地域の方々が造り物をどのように考えているのか、いままで分からなかった部分がたくさん出てきたのです。本当の意味で地域とつながれたのだと思います。お祭りの次の日、材料となった手持ちのかざぐるまを地域の方々にお配りしました。たくさんのかざぐるまがもらわれ、地域と造り物をつながげることができました。

八木ラボ 愛宕祭 立山ヅクリ

古くは宿場町として栄えた奈良県橿原市八木地区。毎年夏に開催される愛宕祭において、神様への捧げモノである立山ヅクリのお手伝いを中心としたまちづくりのお手伝いをしています。

2011

立山のタイトルは「日常の１５」。震災で亡くなった方の数だけのハート型を新聞紙からくり貫き、それを素材に日常の風景を空き家に再現しました。今の日常の大切さを感じてもらえればとの思いを込めた立山です。 また街道沿いの空き地では「ひもろぎ遊び」と題して子供たちを巻き込んだワークショップを開催しました。昼間に７ ×７で出来た真っ白のキューブにみんなで自由に絵を書きます。そして夜になるとキューブが分解され、祭りに来た人々の休憩所となります。子供たちによって色とりどりに塗られたキューブが祭を彩りました。



2012

昨年は立山を二つ制作しました。一つ目のテーマは「涼」。町屋を吹き抜ける風を利用した立山です。天井から光る棒を垂らし、風が吹くと全体が揺れ動きます。節電、節電と言われた年でしたが、電気を使わなくても風を感じて、少し涼しげな気持ちになってもらえればと考え制作しました。また、照明の無い空家の暗さが活かされ、幻想的な立山となりました。

二つ目のテーマは「動」。八木の立山に多くみられる動く立山。その動くということを子供たちに感じてもらえる立山です。透明の板一面に作られた歯車が、一か所を触ると連動して動きます。そして後ろの照明により大きく拡大され、動く影の歯車で空間が埋め尽くされます。触れることで子供にもとても喜ばれ、今まで見るだけだった立山が少し身近に感じてもらえたかと思っています。

2013

今年のテーマは「横大路-伊勢神宮」。大阪から八木を通り、お伊勢さんまで繋がる横大路が出来てから 1400 年という節目の年でした。その道中を表現した立山です。そして伊勢の宇治橋の柱が太鼓になっており、叩いて楽しめる要素を取り入れています。また、素材も極力、八木のまち中から集めようとの思いから、近所の竹藪から竹を切ってきたり、山へ入って枝を拾いにいったりしました。立山とは別に「八木の灯り」という、街道沿いに手作り灯篭を並べるイベントを始め、子供たちが描いた灯篭が道を飾りました。

八木のまち

下ツ道・横大路

八木のまちで交差する下ツ道と横大路。下ツ道は平城京朱雀大路の延長であり、横大路は大阪から伊勢神宮をつなぐ道でした。

立山

この一年にあった出来事を神様にご報告するための捧げものでもあり、祭りに来る人々の目も楽しませてきた立山。昭和 40 年代には 25 組あった立山は年々減り続け、今は 2,3 組しかつくられていません。

ほこらお助け隊

八木のまち中に愛宕祭の期間中だけつくられる「ほこら」。まちの方も年々高齢化しているため、力のいる作業は大変です。それを学生が手伝わせて頂き、ゆくゆくはまちの若い人も参加して支えていくような形になればと思っています。

● ほこらの位置

新たな仲間の登場

- 地元医大生による空家改修 -

地元「奈良県立医科大」のグループによる空家を改修して食堂と寺子屋にしようというプロジェクト。何年も関わり続けて活動しているとまちづくりへの様々な参加者が登場します。

お絵描き WS in 晩成小学校

愛宕祭の会場にもなっている晩成小学校。そこに通う子供たちにみんなで協力して立山をつくることの楽しさを伝えたくて実施したワークショップです。白く塗られた枝に思い思いの色を塗ってもらいます。それを貼って一枚の絵を描くことで協力することの楽しさを体感してもらいました。

Project OSC

さまざまな社会とつながりながら、協働できる。
学生が社会をつなぐきっかけになる。

■Project OSC とは

Project OSC は大阪ステーションシティの魅力を発見し、『大阪ステーションシティらしいまちの風景』を生み出していこうというプロジェクトです。

2012 年 3 月に大阪ターミナルビル株式会社（以下 OTB）からモニター調査を依頼されたことがきっかけで始まりました。
その後フォトコンテストや魅力を引き出す提案を OTB にプレゼンテーションし、提案実現を目標に活動しています。

2013 年 10 月には提案の 1 つである風車案を時空の広場で実現させ、広場を訪れた人々にたくさんの発見や感動を与える事ができ、『大阪ステーションシティらしいまちの風景』を生み出しました。

■Project OSC メンバーによるモニター調査 - 2012/ 春

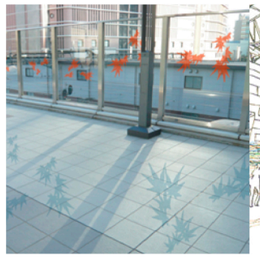
大阪ステーションシティを実際に歩き、魅力や調査によって得られたことを住民集会と名付けられた OTB と Project OSC メンバーの成果発表の場でプレゼンテーションを行い、継続的に関わり続けながら『大阪ステーションシティらしいまちの風景』を考えていくことになりました。

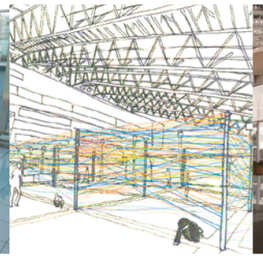
■フォトコンテストによる魅力調査 - 2012/ 夏

Project OSC の視点（建築的視点）だけでなく、一般利用者の視点も取り入れる事が重要だと考えました。
そこで大阪ステーションシティを利用する人々が、「どこに “まち” としての魅力を感じているのか」、「“まち” として感じられない場所はどこか」を知るために、調査の一環としてフォトコンテストを行いました。

■住民集会 (提案発表会) - 2013/ 夏

大阪ステーションシティ 時空の広場において、魅力を引き出す提案を 5 つ発表させて頂きました。
審議の結果 5 つの提案の内、かざぐるま案を今年 10 月に実施させて頂けることになりました。


かげあそび


糸案

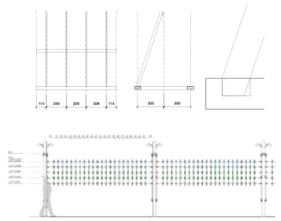
水盤案

布屋根案

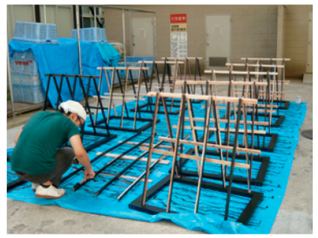
かざぐるま案

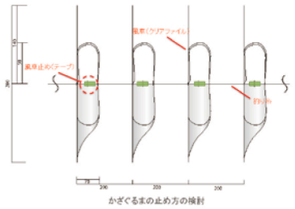
■宙に浮かぶ 1000 のかざぐるま - 2013/ 10/ 10 ~18 , 10/ 25

OTB のご協力のもと行政機関との調整、施工方法の検討、色・素材の検討、安全確保の検討など幾多の課題を克服し試行錯誤の末、合計 1788 個のかざぐるまを広場に展示することができました。



金具・ワイヤーの検討




かざぐるまの止め方の検討

・提案のねらい

時空の広場の魅力の一つである “風” の可視化をかざぐるまによって実現させ、今回の展示やワークショップを通して訪れた人々の思い出作りのきっかけとなることが、大きな目標の一つでありました。
広場で目にしたのは、風で回るかざぐるま、風でそよぐ花々、はしゃぐ子供たち、見守る父母、写真を撮る人、イスに座って景色を楽しむ人、楽しそうに会話をする人々、、、
広場が人々の笑顔で満ち溢れている光景を目にした時、私たちの提案が人々の記憶に刻まれるような風景を作り出すことができたと実感できました。

時空の広場には各々の時間を楽しむ人々に溢れ、ここにしかない風景が生れていました。

・成果

実施期間中にはかざぐるま作りワークショップと手持ちかざぐるまの配布を行いました。
ワークショップでは老若男女様々な方々が参加され、640 個の世界に一つしかない模様のかざぐるまで広場を彩ることができました。
後日その唯一無二のかざぐるまを手持ちかざぐるまにし、広場を訪れた人々に配布しました。
まるで、広場で生まれた思い出をお裾分けしているような感覚を覚え、私たちもたくさんの経験と思い出を得ることが出来ました。

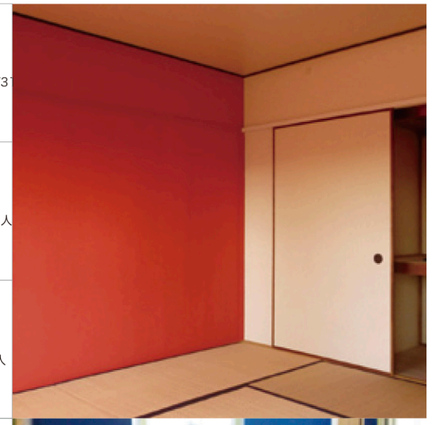
時空の広場を訪れた人々の感動・発見はかざぐるまという形としてあちこちに広がっていくと同時に、記憶としても人の中に残っていくことになればとても嬉しいです。

■学生だからこそできたこと

Project OSC メンバー以外のさまざまな人達とつながり、協働することで提案を実現することが出来ました。
『宙に浮かぶ 1000 のかざぐるま』は武庫川女子大学の学生との共同で提案し、プロの方に助言を頂くことで施工面の精度を高め、株式会社ジェイアール西日本コミュニケーションズの方に施工方法を習い、OTB の方々の様々な協力のもとで実現しました。
そして、プロジェクトメンバー全員で試行錯誤してつくられた風車、幼稚園の園児が書いた絵や色を塗った紙から出来た風車、WS に参加して頂いたさまざまな年代の人達によりつくられた風車で時空の広場は彩られました。
自分達だけでなく、さまざまな人々でつくられたからこそ、たくさんの発見と感動を得られたのだと感じます。

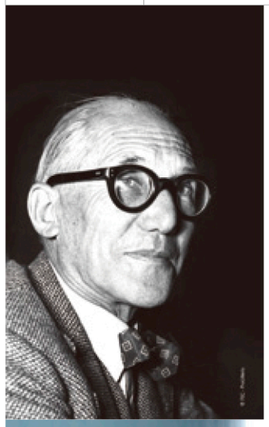
Project OSC の活動での学生の一番のチカラは『さまざまな社会とつながりを持ちながら、協働できる』ことです。
このチカラがあることで、『アイディアを社会に実現させる』うえで立ちはだかる幾多の壁を越えていけるのだと思います。

男山団地 C2-305住戸 DIY改修実験		改修期間 12/12/10〜13/01/31
		DIY塗装 計18日間　163時間・人
施工者	坂口文彦 辻村修太郎 中尾礼太 吉田祐介 吉浦啓史	DIY家具 計 8日間　16時間・人
塗装費	水性ケンエース 白・黒　12L 青・黄色 4L 調色料 計 4,9000	ローラー 刷毛 マスカー ブルーシート ウエス 等 計 10,000
DIY家具費	パイン集成剤 ブランケット ステンレスパイプ ビス 等 計 15,000	メッシュパネル 金具 ビス 等 計 2,600
ウッドデッキ費	1800×900×100 2セット 1200×900×100 1セット 計 65,000	

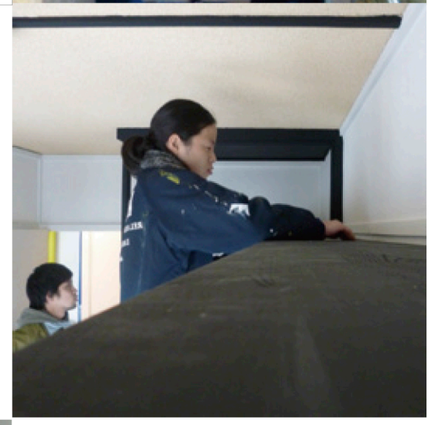


塗装のレクチャーで職人さんに塗って頂いた
赤色から DIY は始まりました。
「簡単ですよ」とサッと一面を塗り上げた
職人の技を目の前にして、
DIY へのモチベーションが高まりました。
「ル・コルビジェの部屋」というコンセプトは
この赤い部屋の感動から決まりました。

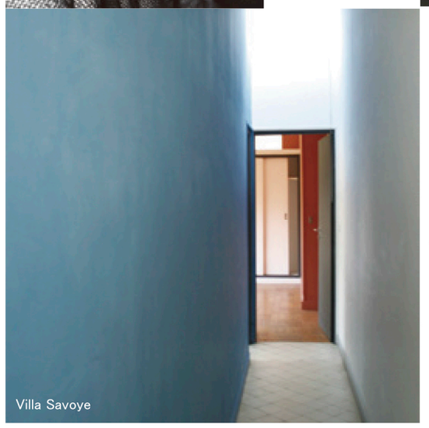
「白い方が良かったかも..。」
全ての壁を青色にすると手前の壁が強調され
空間に広がりがなくなってしまいました。
白に戻すと壁が1枚浮き、奥行き感がうまれました。
現場でやって見ないとわからないのがDIY。
たくさんの発見がありました。



Le Corbusier
1987. 10. 6 - 1965.8. 27



一番苦労したのは棚の取付け。
押入を解体して、ブラケットを壁に取付、
棚板を切り出して、やすりで調整。
今まで圧迫感のあった3畳の和室は、
使い方の想像が膨らむ部屋へと
生まれ変わりました。



Villa Savoye

提案パース

平面図

意見交換

男山団地の住民に、再編提案を見ていただいたり、現状について意見を聞く場を設けました。

その中で、団地内に'気軽に立ち寄れてお話しできる場所がない！'という意見がありました。

木村工務店

丹波、OSC、竹嶋邸など研究室の様々なプロジェクトに携わってもらっている工務店です。工務店の社長は木造設計製図の元非常勤講師です。研究室の卒業生も木村工務店で働いています。

主に施工を担当していただきました。今回使用した丹波の木材は、床材の厚が45㎜、棚材の厚が26㎜と30㎜、建具は高さ2,850㎜、幅4900㎜の欄間有りの3枚引き戸で、職人レベルの技術が要求されました。棚の細かいディ―ティールや、建具の寸法、引き戸の吊るし方など意匠と施工の打ち合わせや、施工期間の段取りなど学生が工務店と直接関ることで学生アイデアが現実的にどのように実現するか、その過程を一緒に考えることができました。

出町 慎（佐治スタジオ室長）

丹波の人。研究室のOBで長く丹波と関ってきていて、丹波の活動や他のプロジェクトでも木村工務店と関係を持っています。

だんだんテラスで使用している木材は全て丹波の木で、製材も丹波で行っています。木材の発注、意匠の相談など行っていただきました。どっしりとした安定感のある床や、それに負けない棚、だんだんテラスで人を迎える立派な建具は丹波の木がないと実現できません。良い香りと評判も上々です。

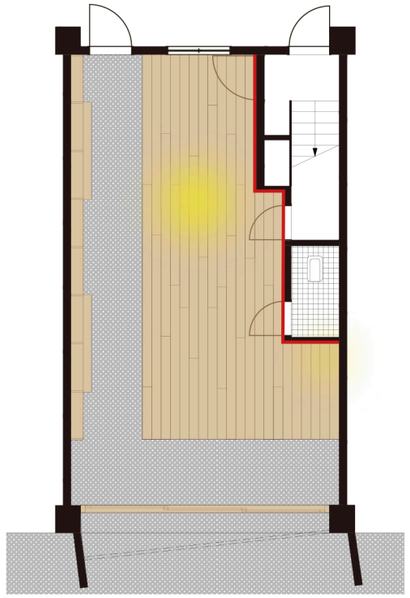
だんだんテラス、オープンに向けて

団地内の商店街の空き店舗を利用した、コミュニティ拠点の開設が始まりました。

関西大学、八幡市、URが三者協定を結び、この場所を「団地」について「談話」するための拠点にします。

だんだんテラス

「団地」について、「談話」する。
365 日オープンの、
男山団地やその周辺の住民が気軽に集える場所。
ガランドウな空間に、
可変性のあるテーブルを並べることで、
会議空間や BAR 空間など様々な空間に対応できます。
通り抜けれる土間は、
バス停から団地に帰る人の動線になり、
いつでも点いている灯りは、
帰ってきた人を安心させます。
今後は団地研究の情報発信として、
住民との意見交流の場として機能し、
NPO や自治会などの地域団体が運営していけるような
基盤づくりを進めます。



平面図

だんだん、着実に…。

365日学生が常駐し、誰でも気軽に立ち寄れる場所。野菜市や家具作りワークショップ、BARなどのプログラムを行い、学生が、地域の方とつながりを深めていきます。今後の活動に乞うご期待！

長町 志穂（LEM空間工房社長）

都市やまちづくり、建築物やプロダクトなど幅広く活躍する照明デザイナー。研究室の合宿に参加していただいたり、長町さんのプロジェクトに参加させていただいたりしています。

照明計画の相談にのってもらいました。色温度や配置計画、電球の種類、電球の明るさの表示、照明器具の構成と取り付け方、商品メーカーや相場などの安産性、灯篭WSのやり方など様々なことを教えていただきました。パソコン上の画像を色付けしながら、豊富な経験と感覚で一緒にスタディをしていただきました。夜のだんだんテラスは帰ってきた人々を優しく出迎える光に包まれています。

建築環境デザイン研究室

今までのプロジェクトで様々な人と交流し、関係を築いてきました。研究室の方針である、「みんなでやりきること」「関り続けること」を大切にして活動してきました。

設計や打ち合わせ、誰にどのようなことを相談するか考えたり、相談の交渉、モックアップの作成をしながら、自分達の提案を関っていただいた方々と協力し合いながら実現まで進めてきました。また、学生でできる、看板・ポスター作り、ペンキ塗りは自分達で行いました。

呼吸する集落

カンボジア・カンポンプロック村における美しい両棲集落の実測調査

—カンボジア・トンレサップ湖カンポンプロック村—

カンボジアのほぼ中央に位置しているトンレサップ湖は、水域面積が季節とともに大きく変わることから『伸縮する湖』として知られている。水域面積は渇水期 (2月7月) の 3000ｋ㎡ (琵琶湖の3倍) が浸水期 (8月1月) には3倍以上に拡大し、10000ｋ㎡になり、水位の上昇は8ｍ以上にも及ぶ。トンレサップ湖には、渇水期には陸地であるが、浸水期には水面となる浸水域がある。

カンポンプロック村は、アンコールワットへの観光拠点として知られるシェムリアップより南東へ21ｋｍに位置し、トンレサップ湖の浸水域に立地する。そのため、渇水期には高床式住居が空中高く建ち並ぶ集落が、浸水域には住居の床下まで水が達し、水上で生活をする水上集落へと様相を変える。自然環境の変化に呼吸を合わせて人々が暮らす集落である。

カンポンプロック村では 3042 人が 441 戸の高床式住居で暮らし、世帯の9割がトンレサップ湖での漁業を生業としている。向かい合う二列の住居が南北に 1.2ｋｍの直線をなし建ち並ぶ構成が、際立って美しい。住居は、縄で縛られた木造軸組で、壁や屋根には主に「トタン」や「ヤシ」の軽い素材が用いられている。床板は固定されておらず可動式である。二列に並ぶ明快な構成が簡単な技術の集積に支えられた「柔らかさ」を内包した構造となっていることが、自然環境の変化に応じて住居の空間構成を変えて暮らすことを可能にしている。

—調査概要—

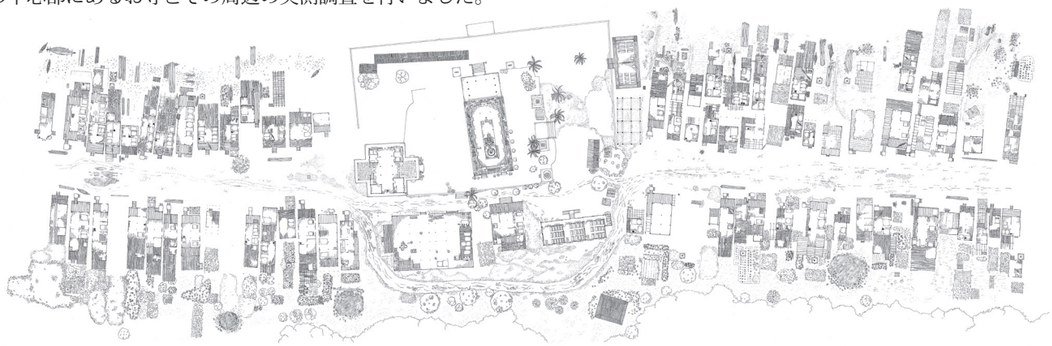
2005 年から 2012 年にわたって関西大学学生を始め、他大学の学生、専門家の方々を含めた述べ 77 人が集落に訪れ、実際に集落に住み込み、集落全体の住戸配置と、寺院、学校、住戸の内部を実測し図面化した。カンポンプロック村での調査を毎年（渇水期と浸水期 年２回）継続的に行うことで集落が時を刻む姿を記録し続けている。

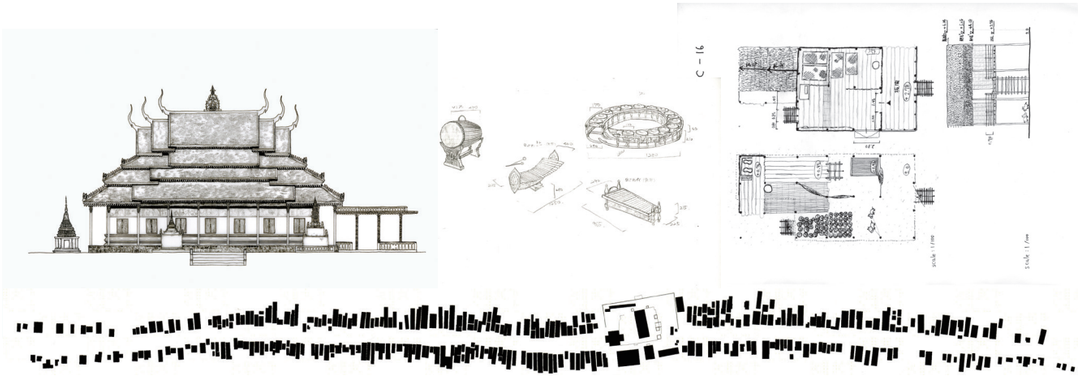
2004

偶然見つけた写真を手掛かりにカンポンプロック村を訪れることになりました。

2005

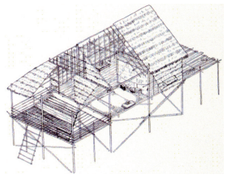
最初は何も分からないまま初めて村を訪れました。調査初年度は集落全体の構成を把握するため、各住戸の配置と集落の中心部にあるお寺とその周辺の実測調査を行いました。

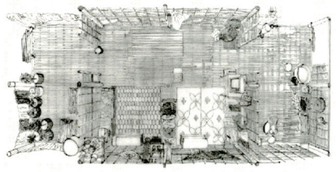


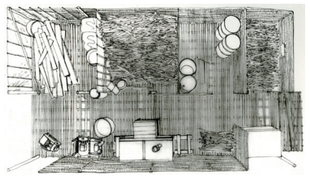


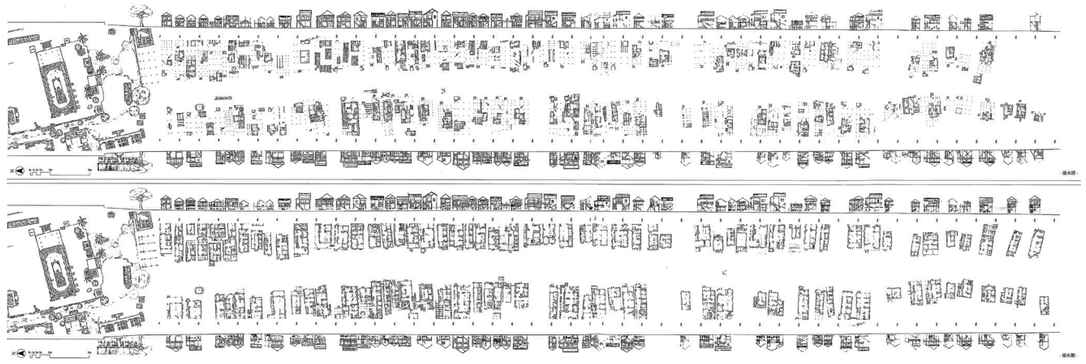
2006

調査２年目は帯状広場を形作る建物の立面や各住戸の細部について実測を行いました。
まだ日差しが弱い早朝に実測調査に行き、強い日差しが照りつける日中は図面を描き、日が傾きだす夕方にまた実測調査へ向かう日々が続きました。



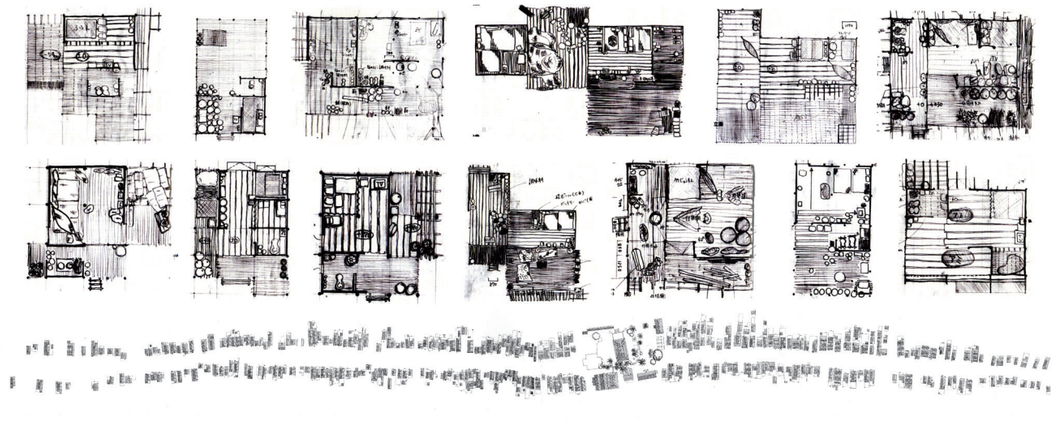






2007

季節移住仮説集落の実測を行い各住戸の平面図を描きました。また、初年度に実測した住戸の位置関係をより詳細に把握すりため全体の配置図を描き直しました。



2008

東京新宿のコニカミノルタプラザで「両棲集落　実測図 × 山田脩二の写真」展を行いました。調査に同行してくださった山田脩二さんの素晴らしい写真と共に、これまで学生が協同して作成した実測図の全てを公開展示し、多くの反響をいただきました。

2009

調査開始から４年目。一通りの実測を終えていたこの年は、これまでの「集落の把握」から「集落の変遷」について調査を行う事にしました。建物の建て替えや新しく建った建物、無くなってしまった建物などを一戸ずつ調べていきました。また、我々が毎年調査に訪れているためカンポンプロックの住民も慣れてきたのか、調査をしている様子を近寄って興味深そうに眺めていました。

2010

これまで住戸の配置や立面など集落全体を捉える実測を行ってきたのに対し、住戸の表側に張り出している前デッキの使われ方の調査や住戸の裏側にある給水管の調査を行うなど、調査はより細かな部分について行うようになりました。過去の実測データを片手に、手分けして全住戸について調査を行いました。

2011

1200m にも及ぶ集落の微妙な変化を把握するため各住戸の連続立面を写真におさめました。住民の温かい了承を得て撮った一戸一戸の写真は時代を表現し、記録として残し続けていくことでゆっくりと時を刻む集落の風景を見守っていきます。

2012

調査７年目のカンポンプロック村。各住戸の脇には将来電信柱の役割を果たす背の高い木が立ち並んでいました。また帯状広場に顔を出すお店が増えていたり、集落からトンレサップ湖を結ぶ空中通路が建設されていたりと、刻一刻と変化しているカンポンプロック村を肌で感じました。